12月

【収蔵品紹介】煎茶会図録③

2023年8月号と10月号では、大阪と京都で開催された煎茶会の図録を取り上げ、煎茶会における盆栽の扱いについて紹介しました。今号では、煎茶会から発展するかたちで盆栽が切り離され、盆栽独自の陳列会が開催されるようになるまでの経過を東京の動向からみていきます。

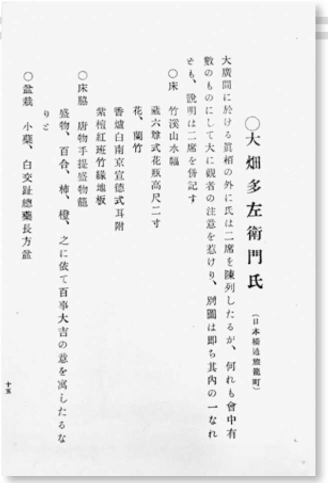
まず、明治25年（1892）刊行の『美術盆栽図』を紹介します。本書は、愛好家の田口松旭や7軒の東京の盆栽園が発起人となり、巣鴨・染井などにある30軒の盆栽園が賛同し、東京本郷の料亭を貸し切りで開催した陳列会の図録です。本書は、盆栽の部と煎茶席の部に分かれ、それぞれ挿絵と目録により構成されています。盆栽の部の挿絵には煎茶道具や文房具が一緒に飾られている図が含まれていますが、目録として文字情報があるのは盆栽のみです。続く煎茶席の部の目録構成は従来の煎茶会図録を踏襲しており、全体として、挿絵に見られる陳列方法や料亭を会場としている点からも、煎茶会の影響が色濃く残っています。

『美術盆栽図』

次に紹介する明治36年刊行の『盆栽瓶花聚楽会図録』は、盆栽家が集まった聚楽会により、同じく東京の料亭を会場にして開催された陳列会の図録で、盆栽園や東京・埼玉の盆栽愛好家が参加しています。本書の緒言は、盆栽雑誌『盆栽雅報』の編集を担った『萬朝報』の無待庵（生島一）が書いています。ここでは、「従来存する一二の画譜図録は所謂文人的にして、雅趣は即ち之ありと雖も未だ真を写し得たりと云ふ可からず（中略）其実況を写生せしむること丶せり」とあり、陳列会を記録する図録として、文人画的な「写意」を示すものから、「写生」したものへ転換を図りました。

また、本書は床や脇床など座敷の構成に合わせて品物を記載する方法を採用し、文人煎茶の世界で重んじられている道具が目録の冒頭に並ぶ従来の図録とは異なる目録構成になっています。文人が重宝した道具から座敷飾りの構成に重点が移ったことがうかがえ、盆栽を中心とした現在の座敷飾りが確立される過程を紐解くヒントになると思われます。しかし、飾り道具や飾り方は、従来の煎茶会の影響が引き続き残っており、煎茶会の枠内での飾りを模索していた段階と言えます。

最後に、東京の盆栽界において、文人的煎茶会から盆栽を切り離した陳列会が生まれてくる過程を『盆栽雅報』から見ていきます。『盆栽雅報』は薫風園と香樹園が発起人となり立ち上げた盆栽同好会の機関紙です（参考：本誌令和2年8月号）。明治39年5月創刊号の「発刊の辞」に掲載された檄文では、「同志相集て倶(とも)に賞し偕(とも)に談ずるの楽みは尚一層深きものあり、聚楽会一派の諸氏が陳列会を開催することあるは即ち是れが為なり、然れども一年僅(わずか)に一二回に過ぎざるは我等の大に遺憾とする所」と、聚楽会に言及し、陳列会の開催回数が少ないことを嘆いています。その理由として、「盆盤は勿論書画骨董の末に至る迄、其選択に意を凝らして、謂ゆる一席持の陳列を為す」ことを挙げ、従来の料亭を貸し切り、盆栽をはじめ、飾りの道具一式を要する陳列会の在り方に問題があると指摘します。そこで盆栽同好会は、「軽便なる月次盆栽会を開催し、之に依て孤居独楽の境を脱して社交の域に進むの途を啓(ひら)き尚都(と)鄙(ひ)遠近の同好者と楽みを偕(とも)にせん」ことを目指しました。これらの著述から、煎茶を軸とした煎茶会から、飾りの方法を引き継ぎながらも書画骨董の陳列を主眼とした煎茶会から、飾りの方法を引き継ぎながら盆栽メインの陳列会へ移行し、更には一部の高踏的な趣味家の世界の中で嗜まれていた会から、より開かれた会へ移行しようという試みが読み取れます。文人煎茶から盆栽が切り離され、現在の展覧会に見られるような盆栽展示が生まれる端緒がここに見られます。その背景には、



○大畑多左衛門氏　（日本橋通旅籠町）

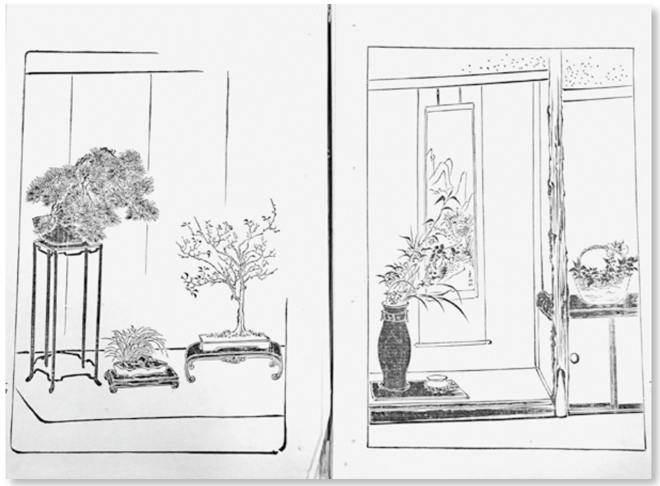
大廣間に於ける眞栢の外に氏は二席を陳列したるが、何れも會中有数のものにして大に観者の注意を惹けり、別圖は即ち其内の一なれども、説明は二席を併記す

○床　竹渓山水幅
蔵六窯式花瓶高尺二寸
花、蘭竹
香爐白南京宣徳式耳附
紫檀紅斑竹縁地板

○床脇　唐物手提盛物籠
盛物、百合、柿、橙、之に依て百事大吉の意を寓したるなりと

○盆栽　小葉、白交趾總藥長方盆

十五



『盆栽瓶花聚楽会図録』

「近来盆栽を以て我邦特有の美術品なりとすの議論亦甚だ盛んなり、果して此の説の如くならんには、盆栽は独り閑人の閑事業に非らず、又社交上の贅沢事にも非らず、当に真面目に研究すべき一個の芸術たり」という、盆栽を趣味や飾りの一道具ではなく、独立した一つの芸術へと昇華させようという思いがあったようです。

ただ、盆栽をメインとした陳列方法を確立するまでには、試行錯誤があったようです。『盆栽雅報』創刊号の飯田聴泉による「盆栽昔譚」では、煎茶家から陳列方法について非難を受けたことが記され、「疎ならず密ならず、盆器の形色、台の高下方円等を考量」することで漸く観衆の賛同を得たといいます。また、明治41年8月発行号の老田頑松による「史稗盆栽」や大正2年7月発行号の去来園主人による「陳列盆栽の生命」では、陳列方法の意見の衝突や議論があったことが記されており、陳列方法が確立されるまでに長い年月と苦悩があったことがわかります。

3回にわたって、現在の盆栽へと至る過程を、煎茶会図録から紹介してきました。紙幅の関係で言及できなかった点や、更に研究を進めて明らかになった点を含めて、特別展「煎茶と盆栽～「盆栽」の夜明け」にて紹介をしますので、是非ご来館ください。

（当館主事　立石見雪）